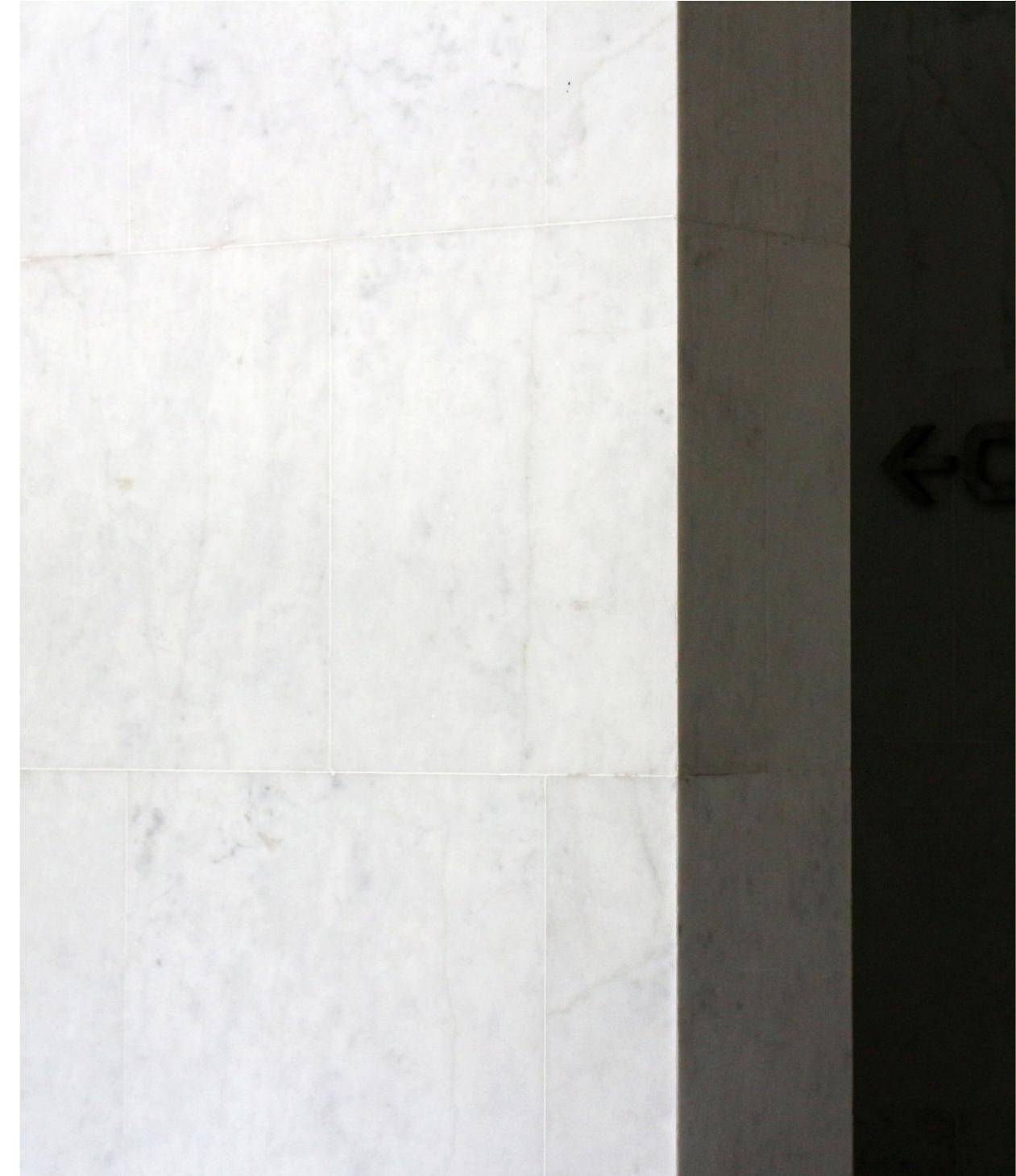


2017年3月に思うこと

守安 收

2月1日から常設特別展示「島村光・金重有邦・隱崎隆一展」が始まりました。備前焼の世界で強い個性と卓越した技術力を駆使して先鋭的な作品を生み出す彼ら三人三様の魅力が満載です。近年やや低調と評される備前焼ですが、作品からは真摯に土に向き合う姿勢、<伝統>を継承しつつも<前衛>として未来を拓く構えが明確に看取できます。造形芸術としての備前焼に光明が見えてきたのではないかでしょうか。千年の歴史を有する伝統産業品でもある備前焼の行く末は県民にとっても関心事です。工芸といえば一番に「備前焼」が挙がる土地柄です。日本では数少ない焼き締め陶で、釉薬を使わざとも多彩な表情をみせてくれます。器形や焼成技法においてもまだ発展の余地があると信じています。この小さな展示が大きな果実を結ぶきっかけとなることを願います。▼先月当館に多大な貢献を果たされた二人の方が鬼籍に入られました。福武教育文化振興財団福武純子理事長。福武さんといえば国吉康雄を思い浮かべることでしょうが、財団は私どもの多岐に及ぶ常設企画や教育普及活動にご配慮くださいました。文化勲章受章者である書家の高木聖鶴先生。作品の寄贈はもちろんのこと、岡山の先人たちへの敬意を忘れず、常設展示室の「重森三玲デザイン書院」は先生の浄財で復元できたのです。その書院には上のお三人の備前焼が置かれ、いつもとは違ったたたずまいを見せる情景がとても好ましく思えました。ご冥福を祈ります。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
http://okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原園地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
『美術の夕べ』実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)/年末年始/展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース116号をお届けします。今春はアニメーション制作の舞台裏を紹介する「THE 世界名作劇場展」を開催します。『世界名作劇場』シリーズでは制作にあたってロケハンが行われたことが、作品の質を高めた一つの要素です。「七つの海のティコ」ではシリーズの中で唯一日本が舞台として登場します。そこで描かれているのは瀬戸内海の風景。瀬戸内圏の我々にとって馴染みのある景色です。夏には、東京から京都までの風景を描いた歌川広重《東海道五十三次》や葛飾北斎、写楽の作品などを紹介する「傑作・浮世絵・描き込み」を開催しますのでこちらもお楽しみに。

「美術館の紹介」vol.16

ホール入口の大理石には、イタリア産のピアノカラーラを使用し、光の反射を押された静寂な仕上がりである。「美術」と「音楽」、「光」と「音」を対象として、外壁からホール室内に向けて、花崗岩から大理石、色タイルへと柔らかに移り変わっている。

思い出のなかの『世界名作劇場』

大山 真季(学芸員)

『世界名作劇場』と聞いて思い浮かべるのはどの作品だろうか。私はリアルタイムで見ていないのだが、「フランダースの犬」(1975)の悲劇的な結末が、泣ける名シーンとして子どもの頃に何度もテレビ番組の特集を取り上げられていたことを真っ先に思い出した。ストーリーはあまり知らないけど知っている名作。「フランダースの犬」=名作”という認識で育った。リアルタイムで観ていた作品としては、元気でたくましい女の子ナナミと親友であるシャチのティコが繰り広げる、息の合ったコンビネーションが印象的な海洋冒険物語「七つの海のティコ」(1994)だ。近未来的で便利なメカや船を巧みに操る登場人物達の器用さにわくわくさせられた。

当時から20年以上が経った現在、当館では「THE世界名作劇場展～制作スタジオ・日本アニメーション40年のしごと～」(2017年3月17日-5月7日)を開催中だ。

全26作品に及ぶ『世界名作劇場』シリーズは、第1作目「フランダースの犬」から第23作目の「家なき子レミ」(1997)までの22年間にわたって、日曜19時半から地上波でお茶の間に届けられた。10年後には「レ・ミゼラブル 少女コゼット」(2007)がBS放送で復活し、その後「ポルフィの長い旅」(2008)、「こんにちはアン～Before Green Gables」(2009)へと続く。現在の20代後半から50代前半が子どもの頃リアルタイムで観ていた世代ではあるが、本展の広報を開始してから、その親世代にあたる60～80代の方々にも多くの反響を頂いた。皆の中に共通してあるのは「懐かしさ」であり、長

年にわたって放送されたこのシリーズには世代ごとにそれぞれの作品に対する思い出がある。各世代で青春の思い出曲が存在するように、『世界名作劇場』シリーズには当時ヘタタイムトリップする装置としての役割が含まれている。

本シリーズは、“アニメーションの神様”と称される森やすじ、背景美術を牽引した椋尾笠^{むくおおたかむら}や、背景画など貴重な資料を一挙公開して制作の裏側を紹介するとともに、「職人」の特色を知ることが出来る展示内容となっている。また、作品の各コーナーでは、当時のオープニング映像を流しており、主題歌を聴きながら作品鑑賞をすることが可能だ。懐かしい映像と音楽が一気に当時を思い出させる。

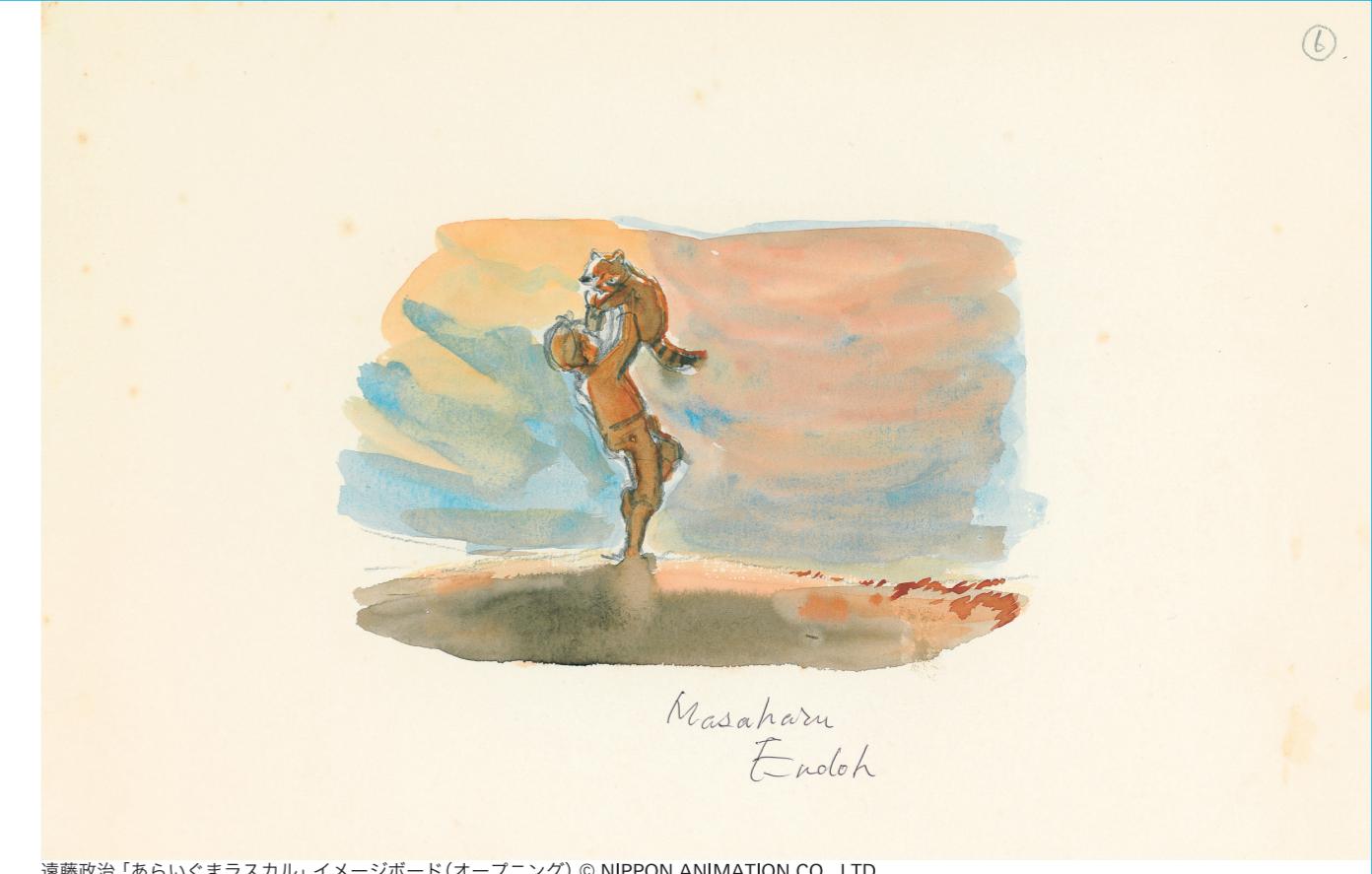
「フランダースの犬」や「あらいぐまラスカル」(1977)の作曲は、「アタックNo.1」など多くのテレビアニメ主題歌を手掛けた渡辺岳夫、作詞は詩人で童話作家の岸田衿子、唄はアニメソングで多くのヒットを持つ大杉久美子が担当した(「フランダースの犬」のオープニング曲を除く)。「母をたずねて三千里」(1976)の主題歌



森やすじ「フランダースの犬」キャラクター設定(ネロ)
© NIPPON ANIMATION CO., LTD.



宮崎駿「赤毛のアン」レイアウト(第10話)
© N.A. ™AGGLA



遠藤政治「あらいぐまラスカル」イメージボード(オープニング) © NIPPON ANIMATION CO., LTD.

は、数々のTV・映画音楽などを手掛ける坂田晃一が作曲し、作詞はオープニング曲「草原のマルコ」を脚本の深沢一夫、エンディング曲「かあさんおはよう」を演出の高畠が担当した。「草原のマルコ」では南米の民族音楽フォルクローレを取り入れ、民族楽器のケーナを加えたオーケストラ収録が行われた。マルコの苦難の旅物語に寄り沿うような、哀愁漂う楽曲に仕上がっている。坂田はこの他に「ふしぎな島のフローネ」(1981)の挿入歌や「南の虹のルーシー」(1982)の主題歌を手掛けた。シリーズ屈指の傑作といわれる「赤毛のアン」(1979)では、プロデューサーの中島順三が当時耳にした映画の主題歌を演出の高畠が気に入ったことが切っ掛けで、その楽曲をつくった現代クラシック界の大御所三善晃に主題歌の制作を依頼した。豪華なオーケストラ演奏には、三善作曲の映画主題歌と同じく、サクソフォン・カルテットが採用されている。「赤毛のアン」の特徴である、アンの空想世界を表現する花が舞う演出はオープニング映像にも用いられ、馬車が駆けるシーンでは蹄の音を想起させるリズミカルなウッドブロックが鳴る。岸田衿子による歌詞と、NHKの教育番組で“歌のお姉さん”として活躍した大和田りつこの唄が、豊かな演奏や映像と一緒に作品の世界観を作り上げている。劇中を彩る挿入歌は三善とその弟子毛利蔵人が作曲しており、舞台となったプリンスエドワード島はスコットランド移民が多いことから、

スコットランド民謡が用いられた。

この他、主題歌の作曲には、オーケストラサウンドのポップスを日本歌謡界に広めた服部克久や、数々のヒット曲を生み出した森田公一に、谷村新司や高見沢俊彦、松任谷正隆といった有名ミュージシャンが参加している。80年代後半の作品には、当時の流行を象徴するように工藤夕貴、新田恵利、西田ひかる、ゆうゆらアイドルが主題歌の唄を担当した。「家なき子レミ」のオープニング曲は作詞・唄をさだまさしが、「レ・ミゼラブル」では齊藤由貴が同じく作詞・唄を手掛けた。「愛の若草物語」(1987)の2代目オープニング曲「いつかきっと！」では四姉妹の夢がテーマとなっており、各キャラクターを演じた声優・潘恵子、山田栄子、莊真由美、佐久間レイが唄っている。会話と歌唱では発声方法が異なるため、キャラクターの声を保ちながら唄うことは難しい課題だったという。この他にも出演声優が主題歌を担当することがあった。

『世界名作劇場』の作品を観ていると聞き覚えのある声に度々出会う。現在も第一線で活躍する人気声優が多数参加していることも『世界名作劇場』を楽しむ一つの要素だ。本展で当時のアニメーション制作の裏側を知ったあとは、ぜひ音楽と声を含めたアニメーション本編を観て欲しい。主人公側の視点で観ていた、子どもの頃とは違う視点でキャラクターたちと再会できるはずだ。

生誕記念展のこと

鍵岡 正謹(顧問)

昨年は伊藤若冲と与謝蕪村の生誕300年に当たった。その前年に「生誕300年同い年の天才絵師若冲と蕪村」展がサントリー美術館で開催されていた。昨年は若冲展が東京都美術館で開催され、上野の山に長蛇の列ができて話題になった。もう15年以上前か、京都国立博物館での「没後二百年若冲」展が超満員で、若冲人気はかけ登っていた。

上野での若冲展といえば思い出すのは昭和46年に東京国立博物館で開催されたもので、その奇想ぶりは楽しくも充実した展覧会だった。しかし会場は人気が少なかったので、よく見られた。昨年の上野の山での驚くばかりの混雑と長蛇の列を実際に眼にして驚かされた。上野の山に長い列ができた展覧会といえば、昭和49年の「モナ・リザ」展をすぐに思い出す。僕もまた長い列のなかのひとりで、西郷さんの銅像あたりから列び何時間かかったのか、やっと東京国立博物館の会場にたどりつき、ひと眼、ジョコンダに出会った。5週間で150万人が入場したとか。

昨年暮、明治美術学会の図書交換会で、偶然に「モナ・リザ LA JOCONDE」展の図録を買った。原弘デザインの図録は薄いが上品で、原色版印刷も美しい。ジョルジュ・ポンピドゥ大統領のメッセージの書き出しに「ここにモナ・リザは東京を訪れた」とあった。その後に《モナ・リザ》はルーヴル美術館で幾度か見ているが、僕はいつもあの上野の山の長蛇の列とともに思い出す。体験とは不思議なものだ。

生誕300年の蕪村の方はといえば、昨年は大きな展覧会は開かれなかった。しかし天理図書館が開館85周年として「俳人蕪村一生誕300年を記念して」展を開催した。俳人に主を置いてはいるが、初めて見る俳画や水墨画は新鮮だった。それにまた、未知の句が200句を超えて見つけられた「夜半亭蕪村句集」(百池旧蔵)も出品されていた。蕪村全句は2800句位だといわれているから、大変な発見となった。僕は水墨画が美しい「ちる梅の五つに分ける匂かな」に眼福を得ていたが、本發句も初出であるとか。小規模だが蕪村に似合う心がこもった展示に満足し、小冊子のような図録を買った。大規模展覧会で大冊の図録は立派であろうが、小さくても意義深い展示や図録もよいものだ。

さてと、岡山は雪舟の出生地である。岡山県立美術館は雪舟からはじまる、としたことは、ひとつの見識であった。3年後の2020年は東京オリンピック・パラリンピックの年になり、雪舟生誕600年に当る。雪舟の大展覧会は京都国立博物館であったし、山口県立美術館での「雪舟への旅」も雪舟研究をもとにした良い展覧会であった。岡山では、雪舟の生地に応じた展示会が期待されている。



雪舟等楊《渡唐天神図》1501年 本館蔵

バリアフリーを超える 「ユニバーサル・ミュージアム」を目指して

岡本 裕子(主任学芸員)

国立民族学博物館で開催された公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開－展示・教育から観光・まちづくりまで」(2015年)への参加、そして同博物館共同研究「『障害』概念の再検討－触文化論に基づく『合理的配慮』に向けて」に参加する機会を得て、「ユニバーサル・ミュージアム」の具体像について考えるようになった。

シンポジウムの企画者であり、研究代表でもある広瀬浩二郎氏(国立民族学博物館)は、ユニバーサル・ミュージアムを、視覚に依存する従来の博物館、さらには現代社会のあり方を問いかけて壮大な実験装置と定義し、「触ぶんか文化」(さわらなければわからないこと、さわって知る物の特性)に注目している。そして、視覚優位の近代社会を象徴する「見せる／見る」文化施設である博物館に、視覚障障者(触常者)が足を踏み入れることで、近代的な世界感・人間観を問いかけてききっかけになるという。近代化のプロセスの中で「障害」という概念が構築されてきたことを考えると、広瀬氏が定義するユニバーサル・ミュージアムを目指すことは、「障害」概念を再検討することになり意義深いという考えに賛同する。

当館では、岡山県立岡山盲学校の美術館来館が一つの契機となり、美術館教育素材の制作やそれらを活用した美術館プログラムの実施、また「さわってもいい作品」「さわらなければわからない作品」を数多く展示した「目の目 手の目 心の目」展の開催(2015年)などに取り組み、触常者と見常者が、ともに文化財を活用できる素材制作や場づくりを試みている。その中で感じることは、見えないことから生まれる触常者(広瀬氏)ならではの視点は、見えることで気づいていない見常者(私)が、常識を点検する場面にしばしば出会うことである。例えば、「さわってもいい」「さわらなければわからない」作品の次ぎは「さわることにより完成する」作品ではないか、という提案。触常者のための「さわってもいい」作品ではなく、さわるという行為が、触常者にとっても見常者にとっても必要な行為である「さわることによって完成する」作品。例えば、「見立て涅槃図」ではなく「さわり立て涅槃図」という考え方。触常者は、手が届く範囲で情報をキャッチしているので、遠近感という概念の理解は難しい。広瀬氏は、見常者の視点に合わせて作品をつくるのではなく、触常者ならではのものとらえ方を使って作品制作を試みた。それが「さわり立て涅槃図」である。見常者のものの見方でしか考えることができない私が、私のものの見方を自覚した瞬間であると同時に、触常者ならではのものの見方が、私のものの見方の世界に豊かさを与えてくれた瞬間でもあった。

2016年4月、障害者差別解消法が施行され、様々な分野で障害者に対する「合理的配慮」のあり方について議論が始まっている。多様なものの見方が尊重される美術館だからこそ、「障害」概念を再考する場となり得るのはないだろうか。バリアフリー(障害者支援)を超えるユニバーサル・ミュージアムを目指すことは、美術館の未来像を考えることにもつながる。



2016年1月「石で遊ぼう」ワークショップより
—さわることにより完成する作品(広瀬浩二郎作)—

新収蔵品紹介

File 09

藤本鉄石
《水墨山水図》《富嶽図》
中村 麻里子(主任学芸員)



《富嶽図》1857年 本館蔵



《水墨山水図》1846年 本館蔵

昨年度、当館では藤本鉄石(1816-1863)の掛軸2点を購入した。幕末の尊王攘夷派の志士であり、壮絶な最期を遂げた鉄石の書画は、これまで当館では《放魚図屏風》《西園雅集図》を含む4件を収蔵するのみであった。岡山出身であり天誅組の総裁の一人としてよく知られた鉄石の書画を、もう少し収蔵したいという希望が何年か越しに叶うことになった。

文化13(1816)年備前国御野郡東川原村(岡山市北区東川原)に岡山藩小吏・片山家の次男として生まれる。諱は真金で、号は数多くあるがその最も知られているのが鉄石である。天保元(1830)年、伯父の藤本彦右衛門の養子となり岡山藩の倉庫番を勤めた。しかし同11年、25歳で脱藩し、大坂から京都、その後南紀、江戸、さらに東北、越後、中国九州など全国を遊歴する。漢詩文・和歌・書画の修業を重ね、文人的才能を發揮した。尊攘派の志士との交流を深め、文久3(1863)年、天皇の大和行幸の先鋒として、吉村寅太郎・松本奎堂とともに挙兵を計画、天誅組を結成し、3人の総裁のうちの1人として五条の代官所を襲撃した。8月18日の政変ののち、幕府は諸藩に討伐を命じ、天誅組は敗走を続け、鉄石は同年9月25日鷺家(奈良県吉野郡東吉野村)にて戦死した。48歳。

画は伊藤花竹(1805-1881)に学んだと伝わる。花竹は博識で知られ岡山藩の藩鬱付中小姓、講堂講釈師、副督監などを歴任した人物。花竹から教わった時期は、鉄石の脱藩前後と言われ、画技を得た鉄石の文人画は京都で評判を得たという。全国を旅し画を売って資金にしたというが、軍事の為の地理調査だったのではないかという説もある。

《水墨山水図》には「丙午夏日 鉄石仙史」とあり、弘化3(1846)年、鉄石30歳の作品とわかる。鉄石の墨画は、強い筆力の中に漂う瀟洒な抒情性が持ち味である。動きのある墨線で描かれており、鉄石山水図の中でも特に精緻な作品の類に入る。右上には鉄石の詠んだ七言絶句が記されている。

《富嶽図》は「安政四年新春丁巳春二月写」とあり、鉄石41歳の作品。遠くに富士山を望み、湾を囲む山々を見下ろす角度で描かれた風景が広がる。流麗な墨線は、おおらかでのびやかに引かれている。富士山を描いたおめでたい図柄であるが、騒々しい世間での束の間の平安を感じた時期であろうか。嘉永6(1853)年ペリー率いる黒船が浦賀に現れると、江戸の町には不安が溢れ、尊王攘夷思想が広がっていく。《富嶽図》はその4年後の作であり、鉄石はその後倒幕運動にまっすぐに進んで行くのである。

展覧会スケジュール

3月
March

3月17日|金|~5月7日|日|

【特別展】

THE 世界名作劇場展～制作スタジオ・
日本アニメーション40年のしごと～

「フランダースの犬」や「母をたずねて三千里」などで知られる『世界名作劇場』シリーズを始め、数々の人気作を生み出した「日本アニメーション」創立40周年を機に企画された展覧会です。アニメーションの礎を築いた「職人」たちによる、貴重な制作資料や原画に加え、アニメーション監督高畑勲や宮崎駿が担当した「赤毛のアン」のレイアウト画など約300点を展覧。本展では『世界名作劇場』シリーズを中心にアニメーション制作の舞台裏を映像や立体物を交えながらご紹介します。

4月
April

各展覧会期間中、当館学芸員によるギャラリートークや美術館講座など随時開催予定。詳しくは当館HPまで。
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

4月15日|日| 14:00~15:00

演奏会 「世界名作劇場を巡る音楽の旅」
演奏 岡山フィルハーモニック管弦楽団メンバーによる
室内楽と歌唱
会場 2階ホール(先着210名)

4月22日|土|、4月23日|日| 10:00~、13:00~、15:00~
記念撮影会 「ラスカルがやってくる！」
定員 各回35組(※要観覧券)
その他 カメラ持参／開始30分前より整理券配布

5月
May

5月24日|火|~6月25日|日|

【岡山の美術展】

日本工芸会中国支部 60周年記念展

公益社団法人日本工芸会は、重要無形文化財保持者(人間国宝)を中心とした伝統工芸作家や技術者等で組織する団体で、1954年から「日本伝統工芸展」を開催し、地域の伝統工芸の向上と発展に寄与してきました。同会には、地方の特色を生かした9支部があり、今年中国支部は創立60周年を迎えます。本展は中国支部に所属する歴代の人間国宝と、金重陶陽賞受賞作家の作品により、支部60年のあゆみを紹介します。

6月
June